

祖典英訳の基礎的課題

田村 完 誓

一

祖典英訳にはどんな問題が付随するか。問題提起を試みてみたい。漢文ないし日本文で書かれた祖師がたの仏教典籍を英訳する作業は日本仏教の国際化に際しての課題である。日本仏教は祖師仏教であるといわれているが、最近、日本仏教の代表的な鎌倉仏教の祖師がたの膨大な典籍のそれぞれの英訳が完成されつつある。またあるものに限つていうならば、数種類の英訳が既になされている。例えば、『教行信証』『正法眼蔵』などの英訳完成が伝えられる現時点において、これらは日本仏教を支える祖師たちの言行とその思想を英語世界に伝える機運が熟してきた証拠と思われる。各宗が海外伝道の歴史を刻み始めてから可成りの年月を経過した現在、海外ではそれぞれ記念行事が盛んであるが、日本から出た宗派の伝道状況の基本には祖師がたの思想、言行、教義の英訳が、不可欠であり、現地における即興的な、その場しのぎの英訳を正確な信頼できる立派なものに叩きあげねばならぬという

危機感があつて、ようやく各宗ともに、これらの祖典英訳の業が、伝道関係の部局において軌道にのり始めたということ、は、むしろ遅きに失した観があるけれども、遅れ走せながら、世界の精神文化に貢献するところが大きいと期待されよう。そこで祖典を実際に英訳する場合、理念的にも技術的にもいろいろな角度から問題が出てくるであろう。例えば伝統教学と近代仏教学の対立・矛盾などの問題も含まれるであろう。

二

仏典英訳に際して参考となることは、過去における学究たちの業績であり、なかならず漢訳伝典を生み出した三蔵法師たちの翻訳方針である。訳業に新風を吹き込み新訳時代をもたらした玄奘（六〇〇—六六四）はあまりにも有名な五種不翻を提唱している。翻訳不可能な場合が五種類挙げられている。すなわち第一の場合は秘密の故に、例えば陀羅尼の如きがそれである。第二は多含の故に、例えば、薄伽梵の如きがこれに当る。この語は自在と熾盛と端嚴と名称と吉祥と尊貴

という六つの意味を兼ねるから翻訳できないとする。第三は此の方に無きが故に、例えばインドにあつて中国にない閻浮樹の如きがそれであるという。第四は古に順うが故に、例えば阿耨菩提の語は昔から訳さないという。第五は生善尊重の故に、例えば般若を智慧と訳さないとする。このような大原則を樹立することは英訳の場合も当然必要なことである。

英訳仏典を一見して、門外漢が読みづらく思うとすれば、やはり、原語があまりにも多く残存していることではなからうか。特に初期の英訳仏典ほど、その傾向が強く感じられ、原文に忠実でありながら、英語として許容される限界をめぐつて、訳者の裁量が一樣ではないからに他ならない。翻訳の方針は千差万別であるといわざるを得ない。

三

最大公約数的にその条件を求め、いかなる場合でもこれだけは具備していなくてはならないだろうと考えられる数点を摘出して大方の参考に供したいと思う。

第一点は、いかなる翻訳といえども、原文から独立して、翻訳自体、誰にもわかり、読み易くなくてはならない。仏教の術語をたいたずらに置きかえるという機械的な作業の結果は、けつして読み易いものとはならない。しかしながら、東西の古典と呼ばれる典籍は現代語に同義語が存しないために、付加的註釈なしには翻訳されにくいものも多くある。そ

のような場合、訳者はそれらの表現を、説明を加えるにせよ、加えないにせよ、そのまま残さざるを得ない。そのようなケースが増えれば、増える程、文章の体裁は益々読みずらくなるのである。殊に仏典や祖典のような讃仰と崇拜の対象となる永い歴史をもつている典籍には、容易に把握し難い幾多の問題点がある場合が多い。英訳があらわれて後でさえも、日本語の現代語訳の刊行が遅れる現象が起つているのは、このような事情が介在するからである。

第二点は、文脈の中での意味の理解をめぐる学説史をふまえたり、哲学的論争史を充分に配慮してしかもそれを表面に出さず、さりげなく素直な英語で訳さなければならぬ。従つて文章論的・文法論的な論争の如何によつては、訳文が一見、原文と相反する表現となりかねないが、別のところで必ず纏めて、グロスアリーにするなり、脚註にするなりして解決を与えておかなくてはならない。殊に原文が漢文の場合、句読点の置き方によつて、訓読法が異なり、祖師によつては、わざと正規の文法を外して、無理な訓読法をしている場合、これを怠つてはならないであらう。

第三点は祖典の英訳が単なる啓蒙書を意図するものではなく、依るべき聖典である以上、本文は少くともなめらかで、読み易く、素直な英文でなければならぬが、別の所では、批判的研究に耐える用意をしておかなければならない。例え

ば英語を母国語又はそれに近い立場とする人びとの便宜を考慮したグロサリーと、逆に祖典の原語を母国語又はそれに近い立場とする人びとの手引きとなるグロサリーとの二種類は、少くとも不可欠であろう。いいかえれば、英訳されないまま英語化されたサンسكريットの語彙、英訳された仏教術語や固有名詞を一纏めにしたグロサリーと、漢語又は日本語を中心としたグロサリーを別に独立させて、そこで漢字を扱うべきであろう。中国語音と日本語音の並記の問題もこのグロサリーの中で解決すべきであろう。

第四点は索引についてであるが、祖典の扱う範囲の言語をすべてアルファベタイカルに包摂して、あらゆる角度からの探求に便宜を与えるべきである。

第五点は脚註は本文よりも少くなければならぬ。脚註が多いことは、学術的な体裁を一見与えるが、いちいち、脚註をみなければ、意味がのみにめない英語ほどやりきれないものはなからう。脚註で扱わなくてはならない問題でも可能な限り、グロサリーや索引において解消すべきである。

第六点は固有名詞といえども可能な限り英訳できるものは英訳しなければならない。英訳できないものや英語化されているサンسكريットなどは止むをえず、原語で出しておくが、括弧してその英訳を添えるべきである。サンسكريットの音写にすぎない術語や固有名詞は原則としてサンسكريットに

還元すべきであるが、その意味をとつての翻訳が定着している場合は、その意味の如く英訳名を出すことが望ましい。その場合、音訳と意訳が同格であることをどこかで明示しておけば申し分ないであろう。

四

たとえ原著が古典であろうとも、或は古典なるが故にこそ、その時代背景と現代とのギャップがあるであろうし、ましてそれを受容した対告衆と現代の対告衆とのギャップも考えねばならないし、ある時代のある地域の特定の対告衆を予想してある祖典が、現代の英語社会においてなお讃仰され、探求されるに足る内容をもっているか否かを検討しなければならぬ。翻訳者は文化圏を異にする原典のおかれた環境のよき理解者でなければならぬ理由がここにある。テキストの内側からその精神的価値に共鳴しない訳者だつたら、その翻訳は不可能である。と同時に、その原典のおかれた時代的背景と読者の理解力という外的条件を充分知悉して、それを現代の英語世界の問題状況と結びつける何かが訳者を促して止まない縁が大切であろう。いやしくも、古典となつてゐる祖師の語録や教学の書はこれからどんな世界の知識人の需用を充たすものである。適確に大綱を把握して誰にも理解できる形で英訳することこそ、これからの現代の三蔵法師に課せられた課題であろう。

（註省略）